

一八八二年十一月二十六日(日)

マニ・マリツク家のブラフマ祝祭における聖ラーマクリシュナ

タクール、聖ラーマクリシュナは、カルカッタのマニ・マリツク氏のシンドリヤ町にある邸に信者たちと共においでになっていた。ここでブラフマ協会の年祭がある。午後四時になるところである。キリスト暦一八八二年十一月二十六日。ヴィジヤイ・ゴースワミー氏や大ぜいのブラフマ協会員たち、それにプレマチャード・バルルと主催者マリツク氏の友人たちが来ていた。校長たちも同席していた。マニ氏は集まった人びとへのサービスに、あれこれと大変な準備をしていた。ブラフラーダの伝記を朗読することも予定に組まれているらしい。それが済んでから、ブラフマ協会の礼拝式が行われるらしい。最後に、会員たちは献食ナラヤナをするのだろう。

ヴィジヤイ氏は今でもなお、まだブラフマ協会に籍を置いている。彼が今日の礼拝式ウパサトを司るもようである。彼はまだ、赤土で染めた衣を着用していない。

講釈師カタクがブラフラーダの伝記を朗読し始めた。父ヒラニヤカシブは、ハリ(神)に敵意を抱き、息子のブラフラーダに無理難題を吹きかけて何度も何度も苦しめた。ブラフラーダは、手を合わせてハリに祈願した。「おおハリよ、父に善良な性格を授け給え」タクール、聖ラーマクリシュナは、これを

聞いてお泣きになった。ヴィジヤイ氏、その他がタクルのそばに坐っていた。タクルは前三昧状態になられた。

〔ヴィジヤイ・ゴースワミーほかブラフマ協会員への教訓——見神とお指図——その後、世人の教導〕  
しばらくしてから、ヴィジヤイたちに向かつておっしゃった。

「信仰が一番大切だ。いつもあの御方の名を称えて讃歌をうたつていれば、信仰が自然に身に付く。ああ、シヴァナートは信心深い！ 砂糖水シロップに浸したチャナバラひた（油で揚げた菓子）のようだ。

自分の宗教だけが正しくてほかの宗教は間違っている、などと言つてはいけぬ。どの道を通つてもあの御方に触れることが出来るんだからね。心の底からのあこがれがあれば、それでいいんだ。道は数限りなくあるし——人の考え方も限りなくある。

ね！ 神様は見えるんだよ。神は口で説明することも頭で考えることも出来ない」とヴェーダにあるが——これは、心がこの世のことに執着しては見る事が出来ぬ、という意味だ。ヴァイシユナヴァ・チャランは、『あの御方は、純粹な心と純粹な知性によつて知ることが出来る』と言つていた。だから、真人、聖者の許もとに出入りして、いつも祈りを忘れずに師グルの教えに従うこと——これが必要なのだ。そうすると心が澄んできれいになる。すると、あの御方が見えてくる。汚れた水もニルマリを入れておけばきれいになる。そうすれば顔も映うつつる。泥の付いた鏡には顔は映らない。（訳註、ニルマリ——種子に水を浄化きれいにする効力があり、インドでは古くから用いられていた）

心がきれいになって信仰が身に付いたら、やがてあの御方のお恵みがあつてあの御方に会える。会つたあとで、お指図があれば人びとを導くようになる。その前に勝手に説教するのはよくないね。こういう歌がある――

生まれてこのかた 塵も払わず

お堂のなかに神像も祀らず

バカなお前の吹くホラ貝などは

ただ煩うるささくて やかましいだけ

十一匹のコウモリだけでたくさんだ

十一匹のコウモリ――十一の器官＝五つの感覚器官(目、耳、鼻、舌、皮膚)と五つの行動器官(口、手、足、肛門、生殖器)と思考器官(心)

自分の胸のなかのお堂を、先ずきれいに掃除することだよ。そして神像をちゃんとお祀りすること。礼拝の用意をすること。何の用意もしないで、ボウボウほら貝を吹いていたって何になる?」

やがて、ヴィジャイ・ゴースワミー氏は壇に坐り、ブラフマ協会の方式によつて礼拝を執り行つた。終わると、また彼はタクルのそばにきて坐つた。

聖ラーマクリシュナはヴィジャイにこう言われた。

「なあ、あなた方は何度も何度も繰り返して、罪、罪と言うが、なぜだい? 百遍、『私は罪人だ、私は罪人だ』と言えば、ほんとに罪人になつてしまふんだよ。あの御方の名を称えているのだ。今さら

私に罪なんてくつつく筈がない、というほどの信念がなくちゃいけないね。あの御方は、わたしらの父さんと母さんなのだ。あの御方にこう言うんだ——『悪いことしましたが、もういたしません』と。そして、あの御方の名を称えろ！ あの御方の名を称えて、体と心を浄めろ！ 舌を浄めろ！』